

左方転位についての一考察

莊口, 美樹子
九州大学大学院文学研究科 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6786956>

出版情報 : 九大英文学. 32, pp.231-252, 1989-11-20. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



左方転位についての一考察

庄 口 美 樹 子

0. はじめに

我々は情報伝達の効果を高めるために、一般的な語順とは異なるがその場面・文脈に最も適していると思われる語順を使うことがある。本稿では、そのような構文の中から左方転位文(left-dislocated sentences)を取上げ、主として機能的な観点から考察する。また左方転位文の統語論的・意味論的特性についても考察し、左方転位文と外見的に類似した構造を持つ話題化文(topicalized sentences)、右方転位文(right-dislocated sentences)との比較も交えながら検討を行う。

次の文(1) (2)で、(a)と(b)は、意味論的に同じ意味を持っている。(1a)と(2a)は左方転位文、(1b)は話題化文、(2b)は右方転位文と呼ばれるものである。

- (1) a. Mary, John kissed her.
b. Mary John kissed.
- (2) a. This room, it really depresses me.
b. It really depresses me, this room.

(Gundel 1977: 46, 119)

(1a)と(1b)の差は‘her’の有無であり、(2a)と(2b)の差は‘this room’が文頭にあるか文尾にあるかである。代名詞で繰り返すか繰り返さないか、文頭に置くか文尾に置くかという統語的違いが、これ等の文の機能的違いと関連

しているように思われる。

本稿では、第一章で左方転位化された名詞句と母型文(matrix sentence)¹中の対応する名詞句、数量詞の付いた名詞句と不定名詞句の左方転位化の容認性について見る。不定名詞句の容認性に関して特定性(specificity)は決定的な要因ではない。第二章では Gundel(1985)、Reinhart(1982)、Takizawa(1987)の提案に問題があることを指摘する。また、Takizawa(1987)の主張とは違って、談話において名詞句が左方転位される決定的要因は、直前の談話でそれが話題ではないことであることを示す。左方転位、話題化、右方転位の機能的違いはそれらの統語的違いと関連していることを明らかにし、AS FOR 句²の付加が随意的ではないことにも触れる。

1. 左方転位の統語論的・意味論的特質

1. 1 左方転位化名詞句とその対応名詞句

左方転位文はふつう(3)(4)のような文と考えられており、対応する名詞句は動詞の目的語でも母型文の主語でもよい。³

(3) Quine, he is a character. (Carlson 1982: 406)

(4) Women, I'll never be able to figure them out.

(Gundel 1977: 46)

Ross(1986: 253)は、この構文が左方転位という変形規則によって派生されたと述べている。文中の名詞句をその文の左に上位付加し、その出所に代名詞形を残すというものである。しかしながら、転位された名詞句と対応する母型文中の名詞句は代名詞とは限らない。また転位化名詞句の前には、as for、concerning、speaking of等の語句が付くこともある。

(5) As for Glumboso, that rogue was sent to the galleys, and never had an opportunity to steal any more.

(W. M. Thackeray, *The Rose and the Ring*: 139)

- (6) Your mother, is your darling mother coming?

(Carlson 1982: 406)

- (7) (Concerning) that article on pronouns, Bill said Mary told him the article wasn't worth reading. (Gundel 1977: 48)

(下線は筆者、以下同様)

転位化名詞句とその対応する名詞句は、(6) (7)で、似てはいるが全く同一形ではない。もし同一であれば、その文の容認性は低くなる。

- (8) a. ?(What about) your mother, is your mother coming?

- b. ?(As for) beans, I don't like beans at all.

(Gundel 1977: 48)

同一指示の名詞句によって転位化名詞句の出所がわかるのであるが、中には、直接対応する名詞句を持たないものもある。

- (9) Dogs, I like Old English and Golden Labs.

(Rodman 1974: 460)

しかしながら、どんな名詞句も転位化名詞句となり得るわけではない。(9)においても、転位化名詞句は母型文中の名詞句と関連している。⁴

1. 2 左方転位化名詞句

以上の例文の左方転位化名詞句は、固有名詞、定名詞句、総称の複数名詞句であった。この節では、数量詞を含む名詞句や不定名詞句の場合の容認性について見る。

1. 2. 1 数量詞

話題化の場合、数量詞 some、many、all や three を含むものも容認される。

(10) a. Many/Some boys, Sarah Bernstein would like to kiss.

(Rodman 1974: 440)

b. All her ideas and opinions she poured out to Chips
during those summer afternoons at Wasdale Head; . .

(J. Hilton, *Good-bye, Mr. Chips*: 17)

(11) A decent career, decently closed; three cheers for old Chips,
they all shouted at that uproarious end-of-term dinner.

(J. Hilton, *Good-bye, Mr. Chips*: 9)

しかしながら、左方転位の場合は容認されない。⁵

(12) * Many/* Some boys, Sarah Bernstein would like to kiss
them. (Rodman 1974: 440)

(13) * (As for) all anthropologists, Bill said they admire Dr.
Mead. (Gundel 1977: 63)

(14) * (As for) three men, we interviewed them yesterday.
(Gundel 1977: 63)

また、few や none を含む句も左方転位されない。

(15) * (As for) few people, they will understand this thesis.

(16) * (As for) none of the doctors, they wanted the senator to
become president.

(以上 Gundel 1977: 63)

数量詞を含む名詞句についての容認性は、話題化と左方転位で異なっている。
このことについては、2. 2. 2で触れる。

1. 2. 2 不定名詞句

(17) (18)が示すように、不定名詞句は左方転位されない。

(17) * (As for) an honest politician, Gwendolyn wants to marry him.

(18) * (Concerning) a phone call, he didn't charge me for it.

(以上 Gundel 1977: 56)

(17) (18)の文で容認されるとすれば、代名詞 him、it から分るように、前置された不定名詞句は特定の(specific)と解釈されるところである。Gundel (1977: 57)は、母型文中の代名詞を one に替えると容認可能な文になると示唆している。

(19) (As for) an honest politician, Gwendolyn wants to marry one.

(20) (Concerning) a phone call, he didn't charge me for one.

これ等の文は、転位化された不定名詞句が、総称と解釈される場合に容認可能であることを示している。

総称を表す不定名詞句の容認性に関して、Takizawa (1987: 228-229)のデータは、Gundel の (19) (20)とは異なっている。

(21)a. (As for) a girl, the man wants to hit *her/?*one.

b. (As for) a man, a certain girl wants to hit *him/?*one.

She doesn't care who it is.

(21) では、対応する名詞句が特定のであろうとなかろうと容認されない。

不定名詞句は、a certain や a particular が前にくることがある。これ等の決定詞は、不定名詞句の解釈を特定のなものにする。Gundel (1977: 58)は、これ等が付くと、容認不可能になると示唆している。

- (22) (As for) a (*certain) bottle of Scotch, I haven't been able to find one; it's the one your cousin brought over last night.

Gundel は、one が特定のであろうと非特定のであろうと容認不可能だと述べている。しかしながら、この場合に容認不可能であるのは、one を対応する名詞句として置いたためであるように思われる。one は、特定の読みを持つ名詞句を先行詞として持つことができないからである。Takizawa(1987: 228-229) は、a certain を含む転位化不定名詞句が起こりうると言っている。

- (23) a. (As for) a certain girl, the man wants to hit her.
b. (As for) a certain boy, a certain girl wants to hit him.

Gundel(1977) と Takizawa(1987) のデータは、この問題に関して一貫していない。不定名詞句の容認性に関する判断には揺れがある。特定性が容認性の決定的な要因ではないようである。

one, someone のような不定代名詞は、特定のであるかどうかにかかわらず左方転位されない。

- (24) a. *(As for) one, I would like to catch one.
b. *(As for) someone, one/he is here to see you.
c. *(As for) anyone, I didn't tell one/him about it.
d. *(As for) nothing, one/it can stop now.

(Gundel 1977: 62)

2. 左方転位の機能的特質

2. 1 話題(topic)

2. 1. 1 文の話題

文の話題は普通その文の主語の位置に来る。(25)の問いに対して(b)と答

えることはあっても (a) で答えることはないであろう。

(25) How's John getting along with his work?

- a. Bill is working with John, and their business is coming along very well.
- b. John is working with Bill, and their business is coming along very well.

しかしながら主語の位置に来るのがいつも話題とは限らない。

(26) a. I can't figure it out.

b. It is no use waiting for him.

主語の位置にあるからといって、対照強勢で発せられない限り 'I' を話題と見なすことはないし、'It' を話題と見なすことはない。

話題を明示的に示すのに、左方転位文や話題化文を使うことができる。Reinhart (1982) が示唆するように、これ等の構文の話題の位置は固定されており、前置された名詞句が話題と見なされ得る場合にのみ容認可能となる。

進行形、there 構文、受け身文等における左方転位化は、その容認性を低くする。

(27) Oh, look! *John, he is running.

(28) *John, there was him still standing in front of the door.

(以上 Kuno 1972: 299)

(29) ?John, Mary was bitten by him.

(30) a. ?Beans, it's John who ate them.

b. ?John, what he saw was a terrible accident.

(以上 Rodman 1974: 453)

(27) と (28) では、Kuno (1972) が述べているように、元になっている文は中立

的記述(neutral description)であり、出来事を表す。これ等の文において、左方転位された名詞句は話題としての解釈を持ち得ない。(29)で‘Mary’は本来、行為者‘John’の代わりに主語の位置に置かれているのであるし、(30a)では‘John’が焦点要素であるので、それぞれの文で‘John’、‘Beans’を文の話題の位置におくと奇妙な感じを与える。

2. 1. 2 話題としての条件

左方転位された名詞句が話題でなければならないと考えると、容認されない左方転位化名詞句は、話題としての何かが欠けているのかもしれないと考えられる。Gundel(1985)における話題の条件としての同定可能性(Identifiability)の概念は、数量詞を含む名詞句の左方転位に関する現象を説明する。Gundel(1985: 87)は、話題は話し手と聞き手にとって既与のあるいは共有の知識であると仮定して(31)の原理を提示している。

(31) Topic-Identifiability Principle: An expression, E, can successfully refer to a (pragmatic) topic, T, iff E is of a form that allows the addressee to uniquely identify T.

聞き手は(12)(14)(15)(16)におけるような数量詞を伴う表現を同定(identify)出来ない。(しかし、(10)(11)で示されているように、話題化された名詞句は数量詞 many、some や three を含むものも容認可能である。この点については 2. 2. 2 で触れる。)

もし(14)の数量詞の前に‘those’のような決定詞を付加すると(32)のように、文は容認可能となる。ここで‘those’が聞き手に文の話題である‘three men’を同定させるからであると考えられる。

(32) (As for) those three men, we interviewed them yesterday.
(Gundel 1977: 64)

(24)のような不定代名詞を含む文が容認不可能であるのもこの条件によって

説明することができる。これ等の文における左方転位された名詞句（即ち one、someone、anyone、nothing）は、少なくとも聞き手の側では同定出来ない。

しかしながら、同定可能性という条件も全ての場合に適切とは言えない。(33) の文は、‘a guy I know’ が聞き手によって同定可能ではないのに容認可能である。

(33) A guy I know, well, our principal caught him smoking in
the john and called the police.

(Margretta 1977: 83, Takizawa 1987: 224 引用)

Reinhart(1982)は、話題が必ずしも旧情報である必要はないと考えて、名詞句が語用論的(pragmatically)に指示的(referential)である場合にのみ話題として解釈されると主張する。語用論的な意味において指示的であるというのは、Gundel(1985: 90)が述べているように、その名詞句の指示対象が実際に言及しようと意図している名詞句を意味するものとして使われるということである。この語用論的な指示性の条件(Referentiality)は、(33)の容認性を適切に説明する。‘a guy I know’ は聞き手にとって同定可能ではないが、語用論的に指示的である。⁶

しかしながら Takizawa(1987: 225)は、この指示性の条件は(34)の容認性を適切に説明しないと述べている。⁷

- (34) a. As for snakes, I've always hated them.
b. Learning they regarded above all as the instrument of
the good life, . . .
c. As for breaking that yellow vase, the little boy did it.
d. That a map of the U.S. hangs on the wall, I can't
believe.

Takizawa(1987)は総称の名詞句や抽象名詞句がそれらの指示対象を持つ

かどうか疑問視する。その上で(34c)におけるような行為についての表現や(34d)における命題の表現を指示的と見なすことは出来ないと指摘する。少なくとも(34c)と(34d)の容認可能性は、指示性の条件では説明できないように思われる。⁸

Takizawa(1987: 225)は、言語学的表現はその概念が発話時以前に意識的知識として話者の心の中に確立される場合にのみ、話題であり得ると考えて、話者確定性(Speaker Definiteness)という代案的な条件を提案している。確かに話者確定性の条件は(34)における文の容認可能性と一致する。しかしながらこれは、誰かが誰かに話をする際に必須の条件であるように思われる。話す前に何について話すかを話し手が意識するのは当然である。⁹

話題の条件として提案されているものの妥当性について見てきた。同定可能性はかなりの事実を説明できるが、条件として強すぎる場合もある。Gundel(1985)が示唆するように、指示性の条件は話題性の必要条件であるが十分条件ではない。同じことが話者確定性という条件にも言える。これ等の諸条件の中に決定的な条件はない。それぞれにある程度の事実を説明するが、説明できない部分もある。一つ概念を条件として、より包括的に容認性を説明しようとすれば、条件を弱めなければならない。話題性を文脈なしに調べることは難しく、談話の中で考えることが必要である。

2. 2 談話における機能

左方転位文が話題を明示的に示す構文であるということは前節で見た。それが実際に談話の中でどのような機能を持つのだろうか。

2. 2. 1 基本的な機能

Keenan and Shieffelin(1976)は、左方転位を、指示対象に何等かの命題が続く形の“Referent + Proposition”の構造ととらえる。

(35) A : What happened to Tom?

B : (a)?Tom, he left.

(b) His car, it broke down, and he's depressed.

(Keenan and Shieffelin 1976: 242)

この対話において(a)は奇妙な感じを与える。もし(a)を“Tom? He left”のように、‘Tom’を聞き返しのよう発すれば容認可能となるであろう。また、Bがどう答えようかと考えながら無意識のうちに‘Tom’を発する場合や、‘Tom’の後に長いポーズがある場合にも容認可能となろう。しかしながら、これ等の場合に発話(a)はもはや“Referent + Proposition”ではない。“Referent + Proposition”はその発話のすぐ前に言及された指示対象について言及するのには使われないと考えられる。他方(b)は(35)の疑問文に対する答えとして容認可能である。¹⁰“Referent + Proposition”を使う時、我々は聞き手の意識の前景(foreground)の中に指示対象を持ち込むのである。そのように考えると、この構造が談話に新しい指示対象を導入すると予想できる。Keenan and Shieffelin(1976: 243)はこの構造を文レベルよりも談話レベルでとらえており、次のような実例を挙げている。

(36) K : Uh Pat Mcgee. I don't know if you know him, he-he
lives in//Palisades.

J : I know him real well as a matter of fa(hh) (he's) one of
my best friends.

しかしながら、発話時に聞き手の意識の前景の中に存在しない指示対象は必然的に談話に新しいものというわけではない。今は存在していないが、いくらか前には聞き手の意識の前景のなかにあった指示対象であることもあり得る。そのような場合は指示対象の談話への再導入であり、(37)がその例である。

(37) K : An' I got a red sweater, an' a white one, an' a blue one,
an' a yellow one, an' a couple other sweaters, you
know, And uh my sister loves borrowing my sweaters
because they're pullovers, you know, an' she c'n wear a

blouse under'em an' she thinks "Well this is great"

(pause)

K : An' so my red sweater, I haven't seen it since I got it.

(Keenan and Shieffelin 1976: 243)

(37)において 'a red sweater' は言及された後、聞き手の意識の背景 (background) に入るが、しばらくして話し手の "Referent + Proposition" によって、前景の中に再導入されている。

さて、ここで Carlson(1982: 410) によって提示された次の対話について考えてみよう。

(38) —Who is Goofy's oldest friend?

—Goofy's oldest friend is Mickey Mouse. Mickey is
Disney's oldest character.

(39) —Who is Goofy's oldest friend?

—Goofy's oldest friend is Mickey Mouse. Mickey, he is
Disney's oldest character.

どちらの対話も意味的には同値である。しかしながら、それぞれの対話の最後の文は、談話において違いを持っている。(38) では最後の文の主語は 'Mickey' であるが、話し手の中心の関心事とは思われない。'Mickey' についての情報を付け加えたただけであろう。この談話における話題は始めから終わりまで 'Goofy' である。他方、(39) における左方転位文は 'Goofy' から 'Mickey' への話題の転換をもたらしている。Carlson(1982) は、左方転位は新しい話題に乗り出す時、もしくは談話の途中で話題を変える時使われると述べている。前景化の概念で考えると、最初の wh-疑問文はどちらの場合にも、聞き手の意識の前景の中に 'Goofy' を持ち込んでいるが、(39) における最後の文は (38) の場合とは違って、'Goofy' の代わりに 'Mickey' を聞き手の意識の前景の中にもたらしている。

Takizawa(1987) は、Prince(1981b) の "Assumed Familiarity"¹¹ における

Evoked (既に談話に存在している) を 'I(=Immediately)-Evoked' と 'R(=Remotely)-Evoked' の 2 つに分ける。I-Evoked は、ある対象物(entity)が問題となる文のすぐ前で談話に存在している場合を、R-Evoked は、すぐ前ではないところで談話に存在している場合を指す。彼は次の例に基づき、左方転位化名詞句は I-Evoked であってはならないと主張する。

(40) What can you tell me about John?

- a. *John, Mary kissed him.
- b. Nothing. But Bill, Mary kissed him.

(Rodman 1974: 440)

左方転位文によって談話に再導入される指示対象は、R-Evoked と見なすことができるので問題はない。しかしながら Takizawa(1987)の主張は(40)の例にのみ基づくものであり、(39)のような場合を考慮にいていない。(39)において、最後の文の左方転位化名詞句は I-Evoked である。(39)と(40)は相反するものではなく、そこには違いがある。(40a)における左方転位化名詞句は、前の wh-疑問文によって確立された話題であり、他方(39)における左方転位化名詞句は、前の談話の話題ではない。(41)は(39)のような場合を支持する例である。

(41) So the Fairy kissed Rosalba with peculiar tenderness, and at once changed her wand into a very comfortable coach-and-four, with a steady coachman, and two respectable footman behind, and the Fairy and Rosalba got into the coach, which Angelica and Bulbo entered after them. As for honest Bulbo, he was blubbering in the most pathetic manner, quite overcome by Rosalba's misfortune.

(W. M. Thackeray, *The Rose and the Ring*: 149)

ここで 'As for' のついた左方転位化名詞句に現れる 'Bulbo' は I-Evoked で

ある。そして(39)の場合と同様に左方転位化名詞句は前の談話で話題でない。左方転位化名詞句として容認可能である決定的要因は、名詞句の指示対象が発話の前に話題でないということである。¹²

2. 2. 2 左方転位と話題化

上述のように、左方転位と話題化のどちらも文の話題である前置された名詞句を持っている。左方転位の場合は、談話において確立している話題を左方転位化名詞句にして繰り返すことは出来ない。話題化の場合はどうか。左方転位と話題化の分布における違いについて考えるために、(42)と(43)の例を比較しよう。

(42) What can you tell me about John?

a. *John, Mary kissed him.

b. John Mary kissed.

(43) What can you tell me about John?

a. Nothing. But Bill, Mary kissed him.

b. Nothing. *But Bill Mary kissed.

(以上 Rodman 1974: 440)

これ等の例において、話題は最初の wh-疑問文によって確立されている。(42)の文脈で話題化は使えるが左方転位は使えない。他方、(43)の文脈で左方転位は使えるが話題化は使えない。これ等の例から、話題化された名詞句は、左方転位の場合とは違って話題の変更を示すのではなく、話題を確認することが分かる。言い換えると、話題化はその文を前の談話に結び付け、談話の流れを保つのである。この話題化の機能は、右の位置に話題化名詞句を持つ話題化文がないという事実を説明する。

一般に数量詞を含む名詞句の左方転位化は容認されないが、話題化は容認されることは、1. 2. 1で見た。この容認可能性の違いは、これ等の構文の現れる文脈の違いによるものであるように思われる。数量詞を含む名詞句の話題化が可能であるのは、前の談話からその話題化名詞句の指示対象が何

であるか分かっているからである。

話題化名詞句は左方転位の場合とは違って、その文の残りの部分に対応する名詞句を持っていない。この統語的な違いは、これ等二つの構文の用法と何等かの関係を持っているように思われる。左方転位化名詞句はしばしば新情報であり、その発話時に談話に導入されることが多いので、母型文においてそれが対応する代名詞によって繰り返されなければならないが、話題化の場合は、話題化名詞句が旧情報であり、聞き手は続く命題におけるその出所が容易に分かるので繰り返される必要がないのではないか。「旧」といっても必ずしも前の談話で言及されていなければならないというわけではない。「旧」と「新」の違いは、その情報が聞き手にとって類推可能であると話し手が判断するかどうかにかかっている。「前の文脈で言われたことから聴者が自分の持っている知識によって類推できると話者が判断することまで旧情報になる。」(Fukuchi 1985: 16) 従って話題化された名詞句が、その発話のすぐ前に現れた名詞句の繰り返しではない場合がある。

(44) A : You see every Woody Allen movie as soon as it comes out.

B : No, Stardust Memories I saw (only) yesterday.

(Prince 1981a: 251)

この対話において、‘Stardust Memories’ は、前の文の ‘Woody Allen movie’ から類推可能である。¹³

2. 2. 3 左方転位と右方転位

Ross(1986: 236) は、(45) のような文の派生を説明するために、右方転位という変形規則を提案する。

(45) a. It gave me much satisfaction, this fact.

(M. Drabble, *Millstone*: 34)

b. I promise I'll write to him tomorrow, your father.

左方転位と右方転位の違いは、転位化名詞句が文の最初に来るか終わりに来るかである。Carlson(1982: 409)は、文に付加された名詞句はその直接の対話主題(dialogue subject)¹⁴を示すと述べている。ここで「文に付加された名詞句」とは、左方・右方転位化名詞句であり得る。即ち、右方転位化名詞句と母型文の間の関係は左方転位の場合と同じで主題と題述である。

新情報は談話において重要であるために、一般に文の後ろの位置に置かれる傾向にある。右方転位の場合には、転位化名詞句は(46)で示されているように、話題を表し新情報ではないのにもかかわらず文の後ろの位置に置かれている。従って、右方転位化名詞句は談話において何等かの重要な役割を持っていると思われる。

(46) —What about women?

—I swear I'll never be able to figure them out, women.

(Gundel 1977: 119—121)

左方転位化名詞句と右方転位化名詞句の機能的な違いは何であろうか。Carlson(1982: 415)は、左方転位化名詞句は対応する名詞句の先行詞であり得るが、右方転位化名詞句の場合はそれはあり得ないと述べている。右方転位文を使う場合は、何について話しているかがその発話時以前の文脈から明らかでなければならない。即ち、左方転位とは違って、右方転位は対話主題の変更を示すのには相応しくない。Carlson(1982)は(47)の対話で(b)には conflict の感情があると言っている。

(47) What about your nerves?

a. That dog, he's beginning to get on my nerves.

b. He's beginning to get on my nerves, that dog.

(Carlson 1982: 414—415)

(47a)の左方転位化名詞句は「犬が話されるべきことである」ことを示唆、即ち、対話の主題を断言している。他方、(47b)の右方転位化名詞句は対話の主題を確認するだけである。

(48) a. Dogs, I like Old English and Golden Labs.

b. *I like Old English and Golden Labs, dogs.

(Rodman 1974: 460)

(48)のように、左方転位化名詞句は直接対応する代名詞を持たないことも可能だが、右方転位の場合には母型文の中に必ず対応する代名詞を持っていなければならない。左方転位の場合はまず最初に対話主題として 'dogs' を断言し、それからそれに関連のある何かを述べるということができるが、右方転位の場合は叙述の前に対話の主題について断言する機会がない。Keenan and Shieffelin(1976)が示唆するように、左方転位文はそれ自体で談話としての機能を持っているが、右方転位文は持っていない。

2. 2. 4 AS FOR 文

Gundel(1977: 52)は、as for, concerning、about 等が、転位された名詞句の前に来ることがあると述べ、左方転位文の言い換え表現として、文例を挙げている。Rodman(1974: 443)も、左方転位される要素とそれ等の語句が共起することがあり、それ等の多くは文の意味と殆ど関係がないと言っている。AS FOR 句の生起は随意であるかのように思われる。しかしながら Carlson (1982: 407)が示唆しているように、AS FOR がないと容認不可能となる AS FOR 文がある。

(49) a. As for the zoo, the animals seemed healthy enough.

b. *The zoo, the animals seemed healthy enough.

(50) a. Speaking of Quine, have you read *Word and Object*?

b. *Quine, have you read *Word and Object*?

(Carlson 1982: 407)

(49)の 'the zoo' も(50)の 'Quine' も直接対応する名詞句を母型文の中に持たない。このように、左方転位化名詞句と母型文との関係が弱い場合に AS FOR が生起する傾向にある。Fukuchi(1985: 81)は、左方転位文の主題が先行文脈と直接関係付けられていないので、AS FOR は文の主題を明示的に示し談話の流れを保つと述べている。AS FOR は主題を明示的に示す機能を持っており、特に主題と題述のつながりが直接的でない場合にその効果を発揮する。¹⁵

3. 結び

左方転位、話題化、右方転位は話題を明示的に示すために使われる。これ等の構文では、文頭(文尾)に置かれた名詞句が話題として見なされ得ることがその文の容認性の一条件となる。統語論的・意味論的特性の幾つかはこの話題性で説明できる。話題としての条件を単一の概念で定義する幾つかの提案の妥当性を検討したが、制約力が強いものは言語事実全てを説明できないし、全てを含むように考え出されたものは必要条件ではあるが弱い概念となってしまうている。

左方転位の基本的機能は、ある指示対象を談話の中に導入(あるいは再導入)することである。Takizawa(1987)による主張とは違って、左方転位される名詞句は、発話の際に聞き手の意識の中に存在すると考えられる指示対象、すぐ前の談話に存在している名詞句でも容認される。名詞句が左方転位化名詞句として容認可能であるための決定的要因は、その名詞句の指示対象が発話の前に話題であったか否かである。つまり、左方転位化名詞句は前談話で話題として確立されたものであってはならないということである。

また、AS FOR 句は随意的に左方転位化名詞句に付加されるのではなく、その有無により容認性が異なることがある。AS FOR 句は、特に左方転位化名詞句と母型文の間の関係が弱い場合に必要とされる。

左方転位は話題を転換する機能を、話題化は話題を確認する機能を持っている。この違いがこれら二つの構文の統語的違いと関連しているようである。話題化名詞句は既に話題として確立した名詞句なので、続く叙述における出

所が容易に分かり、代名詞で繰り返す必要がないと思われる。右方転位にも話題の転換を示す機能はない。それは右方転位が名詞句を文末に移動するため対応する代名詞の先行詞とはなりえず、新しい話題を先に代名詞で示し後で述べるということは情報伝達上適切でないからである。

話題化文も右方転位文も、左方転位文とはそれぞれ違った機能を持ち、異なる文脈で生起する。それはこれ等三つの構文の統語的相違の反映するところである。

註

- 1 Gundel(1977)の用語。左方転位されている名詞句に続く主文を matrix sentence と呼ぶ。
- 2 as for だけでなく speaking of や considering 等の語句も含めて AS FOR 句と表す。
- 3 母型文中の対応する名詞句はその文の主語や動詞の目的語に限られているわけではない。
 (i) My wife, somebody stole her handbag last night. (Ross 1986: 256)
 ここでは 'my wife' が、所有格の 'her' と対応している。
- 4 例えば、次の文は容認されない。
 (i) *As for fruit, Jim likes red snapper best.
 (ii) *As for Cleveland, the Eiffel Tower is spectacular. (以上 Gundel 1977: 66)
 母型文の動詞にも依る。Reinhart(1982: 14)は、次の例を挙げている。
 (i) a. Speaking of Marilyn Monroe, I bought/read a book about her.
 b. ?Speaking of Marilyn Monroe, I lost a book about her.
 (a)は(b)に比べて自然である。転位された名詞句 'Marilyn Monroe' は(b)よりも(a)によって表された出来事と強い関係がある。Kuno(1987: 23)は、本の内容から本を買うことはあっても本をなくすことはない、と述べている。適切な文脈に入れると、(b)も容認され得るが、合う文脈を見付けるのは難しい。
- 5 some, many, all の場合には、母型文中の対照物が主格であると、容認性は多少変わってくる。
 (i) a. Some people, they can't do anything right.
 b. ?Many monkeys, they refuse to eat bananas.
 c. ?All violators, they will be prosecuted. (Gundel 1977: 64)

- 6 指示性の条件で次のような文が容認されないことも説明できる。
- (i) *The nose on your face, these facts are as clear as it is. (Rodman 1974: 452)
- (ii) *As for highway robbery, I call it that.
- (Margretta 1977: 71, Takizawa 1987: 224 引用)
- 7 (34) で(b)と(d)は話題化文である。Takizawa(1987)は話題の例を挙げる際に、左方転位文と話題化文の両方を使っている。
- 8 Gundel(1985: 88)も、指示性の条件に対する反例を挙げている。
- (i) *(As for) something, I bought it.
- (i)が容認不可能であることは、同定可能性では説明できるが、指示性では説明できない。
- 9 Takizawa(1987)は談話における話題化文・左方転位文の使用を限定するのに、(i) NP-level、(ii) Sentence-level、(iii) Discourse-level、の三つの level を区別して考えることを提案している。SD はそれらの文が(i)で満たさなければならない条件である。左方転位に関しては、(ii)における条件を挙げていないので、SD は左方転位に関する二条件のうちの一つとなる。
- 10 ただし Fukuchi(1985: 81)が述べているように、その場合は Tom が車を持っていることが聞き手に分かっているなければならない。
- 11 “Assumed Familiarity” において談話における対象物(entity)は次の三つに分けられる。
- (i) New: 話し手が初めて談話に導入する対象物。
- (ii) Evoked: 既に談話の中に存在している対象物。
- (iii) Inferrable: 既に談話の中に存在しているかもしくは他の推論可能なものから、論理的あるいはもっともらしい理由付けによって聞き手が類推することができると話し手が考える対象物。
- 12 Gundel(1977: 53)は、左方転位文は必ず何等かの暗示的もしくは明示的疑問文(左方転位された名詞句が x である ‘What about x?’)に答えるものであると考えて、(ii)の(a)(b)(c)はそれぞれ(i)の(a)(b)(c)に対する適切な返答であると述べている。
- (i) a. What about this room?
b. What about women?
c. What about this spot in the rug?
- (ii) a. This room, it really depresses me.
b. Women, I’ll never be able to figure them out.
c. This spot in the rug, you better get it out before the party on Saturday.
- 疑問文(i)が明示的に談話のなかに現れるのは、Rodman(1974)や Keenan and Shief-

felin(1976)の例によって示されているように稀であるように思われる。明示的な疑問文である場合は、Keenan and Shieffelin(1976: 245)によって 'special emphasis' と述べられている場合である。そうでなければ、転位されている名詞句を(i)の疑問文の目的語を聞き返している疑問文、あるいは心の中で妥当な答えを捜す聞き手の無意識な発話と考えなければならない。

- 13 ここでは 'Stardust Memories' が 'Woody Allen movie' の一つであるという特別な知識が必要である。
- 14 Carlson(1982)は 'dialogue subject' という語を 'what a sentence intuitively is about' として、'topic' と区別して使っている。
- 15 as for や speaking of のような句の選択は随意ではなく、文脈に依存する。

(i) A : I saw daddy kissing Santa Claus.

B : Speaking of/*As for Santa, what did he bring you for Xmas?

(ii) A : What kind of booze do you like?

B : I don't care much for blended whiskey. As for/*Speaking of bourbon,

I sort of like old fashions.

(以上 Rodman 1974: 450)

as for は既に確立した話題と対照の話題をとる場合に、speaking of は(話題として確立されていないが)すぐ前に言及されているような場合に使われる。(iii)のように speaking of は後置でき、as for は後置できないのは、その違いによるものであると思われる。as for 句を後置すると、聞き手は as for 句を聞く前にその話題が何であるかを推論し難い。

(iii) I enjoy mushi pork, speaking of/*as for Chinese food. (Rodman 1974: 465)

参考文献

- Carlson, L. H. (1982) *Dialogue Games: An Approach to Discourse Analysis*. Doctoral Dissertation, MIT.
- Fukuchi, H. (1985) *Danwa no kouzou*. Tokyo: Taishukan.
- Gundel, J. K. (1977) *Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*. Bloomington, Indiana: Indiana Univ. Linguistics Club.
- . (1985) "Shared Knowledge' and Topicality." *Journal of Pragmatics* 9.83-107.
- Keenan, E. and Schieffelin, M. (1976) "Foregrounding Referents: A Reconsideration of Left Dislocation in Discourse." *BLS* 2, 240-257.
- Kuno, S. (1972) "Functional Sentence Perspective: A Case Study from Japanese and

- English.” *Linguistic Inquiry* III. 3.
- . (1987) *Functional Syntax*. Univ. of Chicago.
- Prince, E. F. (1981a) “Topicalization, Focus Movement, and Yiddish Movement: A Pragmatic Differentiation.” *BLS* 7, 249–264.
- . (1981b) “Toward a Taxonomy of Given-New Information.” *Radical Pragmatics*, ed. by P. Cole, 223–255. New York: Academic Press.
- Reinhart, T. (1982) *Pragmatics and Linguistics: An Analysis of Sentence Topics*. Indiana Univ. Linguistics Club.
- Rodman, R. (1974) “On Left Dislocation.” *PIL* 7: 3–4, 437–466.
- Ross, J. R. (1986) *Infinite Syntax!* ABLEX Publishing Corporation.
- Takizawa, N. (1987) “A Functional Analysis of Topicalized Sentences in English.” *English Linguistics* Vol. 4, 221–237.

資料

- Drabble, M. *The Millstone*. Penguin Books. 1968.
- Hilton, J. *Good-bye, Mr. Chips*. Tokyo: Kenkyusha. 1985
- Thackeray, W. M. *The Rose and the Ring*. Tokyo: Kenkyusha. 1975.